

	キャンプ運営の課題	解決策
北海道	初めて医療従事者不在のキャンプとなり、キャンパー・家族・北海道つばみの会事務局だけの2泊3日となったので、医療トラブル（重症低血糖、DKAなど）の対応が最も大きな課題でした。	①中学生までの家族の同伴を必須とした（過去は小学3年生まで）。②良いか悪いかは別として、家族で過ごせるように部屋割りを行った、③緊急時の連絡体制を確立した
岩手	・スタッフの高齢化等での人員確保 ・費用の削減	・大学生のボランティアスタッフの参加 ・ネット通販を利用し、キャンプ用品の購入金額の減額
山形	フードコートでの正確なカーボカウント、また、慣れていない環境で血糖測定やインスリン注射を安全に行うことができるのか。また、広いテーマパークでキャンパーが低血糖になったとき、本人や他のキャンパー、もしくはスタッフがそれに気づき、重症低血糖を防ぐことができるのか、また重症低血糖になったときにどのように対応するのか。	テーマパークで販売しているすべての食品のカーボ数をテーマパークから事前に情報提供してもらった。フードコート内にキャンプ専用の食事エリアを確保し、キャンパーに安心してカーボカウント、血糖測定、インスリン注射を行えるようにした。また、班構成において、年長のキャンパーと年少のキャンパーを組み合わせることで、年少のキャンパーが低血糖を訴えやすいように配慮し、また、班に医療スタッフを同行させることで、年長児の負担を減らした。
栃木	インスリンやデバイスの最新情報の講習会を前半で行い、後半では、患児間での交流や血糖測定器、CSIIを含めた機器の説明などをハンズオンにて行いました。ただ、宿泊と異なり、実際の血糖測定や血糖管理、シックデイの状況把握ができない点が課題と考えます。	可能な限り、ハンズオンセミナーに近い形で今回の講習会を実施しました。（しかし、限界があるため、2024年はサマーキャンプとして宿泊を予定していきたいと考えています）
東京（つばみ）	酷暑中のキャンプ	屋内プログラムをメインにする。
東京（なかよし）	スタッフ、キャンパーともに初参加者が多く、移動やSMBGなどに時間を要した。学生スタッフの参加費用負担について負担が大きい。	事前準備の段階でシミュレーションを行った。 部活動として学生スタッフは参加してもらい、医学部からわずかながら活動費をいただいている。
東京（わかまつ）	今回のサマーキャンプはコロナ禍の影響で4年ぶりの開催となったため、キャンパーやスタッフともに初参加者が多かった。経験者の少ない中で、これまでのやり方を踏襲するか、改善すべきかの判断が必要だった。また、昨今の物価上昇による宿泊費・移動費などの値上げに伴い、安定したキャンプ運営資金の確保が困難だった。	安全にキャンプを成功させるため、キャンプ当日までにスタッフや患者会員との話し合いを重ねた。また、過去のキャンプ運営費の収支を確認し、できる限りの経費削減や、値上げに対する患者会員への理解、運営費の透明化を行った。
埼玉	3年ぶりというところでの問題が大きかったと感じる。 ①スタッフの確保 コロナの対応は軽微になったものの、まだ外部への派遣を回避する傾向はある。また、キャンプを経験したことのあるスタッフが極端に少なくなった。 ②会計 3年ぶりということで、これまで協力いただいた企業や病院に寄付・広告依頼を行ったものの、ほとんど反応がない状況。	①特に医療スタッフはHPで公募、ベテランスタッフに興味ある人に声掛けしてもらうなど。ただ、明確に協力できないと表明している病院以外は例年の招聘状でご協力いただけた。準備開始時はほぼ壊滅的だったが、最終的にはハーフサイズの今回であれば実施可能な程度は集まっていた。②中止になった3年間も挨拶は欠かさず連絡していたが、ほとんど申し込みは得られていない。企業からの寄附は、埼糖協も苦労しているとのことで、根本的に難しくなっている。申込方法がweb申請のみになっているなどの変化も有りそうなので、調査する。寄
神奈川（相模原）	これまでサマーキャンプの企画・運営をしていた学生ボランティアスタッフが、コロナの影響でキャンプを開催できなかった3年間に、後輩に引き継ぐ機会もなく卒業してしまった。そのため、経験者がおらず、これまでのキャンプ運営方法の抜本的な見直しが必要だった。また、今回は、初参加者が多く、さらに家族参加可としたため、これまでとは違う形の内容を新たに考える必要があり、キャンプの内容自体も一新する必要があった。	今回は保護者役員と医療スタッフが協力し、企画・進行を行った。初参加、かつ家族参加が多かったので、有意義に交流できるように班分けしたり、企画を考えた。
山梨	・2019年以来、コロナ禍明けの初めての対面キャンプであり、経験した学生スタッフがいなくなったことが一番たいへんでした。学生スタッフとも一から話し合い、新しいキャンプとしてどのような企画をしていくかを検討しました。 ・キャンプ地についても、以前よく使用していた場所が閉鎖されたことを受け、今後もキャンプ開催の場所の確保が困難でした。幸い、緑ヶ丘スポーツ公園にご協力いただき、キャンプを実施することができました。 ・また、以前のキャンプに比較して参加希望者が減少していて、参加者を確保することが困難でした。インスリンやCGMなどのデバイスの進歩により、以前よりインスリン療法が学校生活	今回ボランティアで参加してくれた学生スタッフを中心として、新しいキャンプを作っていくことが重要であると考えられました。キャンパーを増やすために、宣伝活動がんばっていくことが必要であり、山梨県外のキャンプ参加者を積極的に募りたいと思います。
静岡	参加者募集（コロナ前に比べ、参加者が少なかった）	・「さかえ」への掲載（県外や初参加者から申込や問い合わせがあった） ・HPをリニューアルしたり、会員個々に広報活動を行ったりしてもらった

2023年度小児糖尿病キャンプまとめ (3)

浜松	<ul style="list-style-type: none"> ・コロナウイルスパンデミック後、初めてのキャンプでしたので、感染対策が最大の課題でした。 ・また、4年ぶりの開催でしたので、初参加者が多く、学生ボランティアスタッフが少なく、人手が足りないことも課題でした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・感染対策に注意し、クラスターの発生はありませんでした。子ども同士は無邪気に交流していましたので、手洗いなどをこまめに行いました。 ・学生ボランティアスタッフが少ないため、参加者を小学5年生以上に絞ったことで、大きな問題はありませんでした。しかし、年少者の参加希望も大勢いるため、年少者は保護者同伴で参加するなど、今後の検討課題です。
東海地区	感染対策	発熱時対応のフローチャートの工夫
富山	コロナ禍による中断のため、参加者の層が薄くなったこと（患児、家族、運営スタッフともに）	ベテランのスタッフ、ヤングOBOGの助力と、準備のミーティングの回数を増やすことで対応できた。
京都・滋賀	コロナ明けでスタッフの参加人数の不足。特に看護師の不足が例年の半数以下になった	ファミリーキャンプに切り替えて、夜の子どもの管理を親に任せた。
大阪（くるみ）	予算運用の問題（企業からの協賛金の減少）	模索中
大阪（杉の子）	酷暑であり、野外活動を強く制限され、熱中症患者を数名出してしまったこと	日が陰ってからの活動を増やしたこと、室内でできる活動を増やしたこと。可能な限りの休憩時間を取り、スタッフの睡眠時間確保のため、夜間の打合せ時間を可及的に少なくしたこと。また、夜回り担当者は翌日フリーの立場とした。翌年以降はさらにプログラム案を変更していく。
大阪（近畿つ）	今年よりキャンプ中の運営（プログラムの作成・実施）をOBOGに任せ、役員は裏方に回って支えるようにした。	前年度までの役員中心であったので、困ったときは協力しあって無事終わることができた。
和歌山	<ul style="list-style-type: none"> ①暑さ・熱中症対策 ②感染症対策 ③キャンパーを増やすにはどうすればよいか 	<ul style="list-style-type: none"> ①野外でのゲーム時や飯盒炊飯時にミストを使用し、冷をとりにやすくした。屋外の活動は夕刻の斜陽後に実施し、休憩を小刻みに取った。 ②感染対策担当看護師を配置し、こまめな消毒および手洗い励行・体調不良者の早期発見に務めた、また、他のスタッフからの連絡を同看護師に集約し、シフト配置した医師との連絡を密に取れるようにした。 ③1型糖尿病患者を診察してる医療機関への連絡を継続する。また、その広報についても継続依頼する。キャンパーを送り出してくれた医師にはキャンプの状況を伝え、参加したことがよかったことを知ってもらう。参加費を安くするこ
広島	施設の環境	大人数のキャンプを安価で使用できる施設に限りがあり、工夫は困難。
島根	スタッフ、特に学生がほとんど対面でのキャンプを経験していなかったことと、初めてサマーキャンプを行う施設であったため、細かい注意点が把握できていないことが多く、安全なキャンプ運営に苦慮した。特に食事や入浴などの流れをスムーズにして予定していた行事を実施することが大変であった。	<ul style="list-style-type: none"> ・キャンプ開催日数を従来の7泊8日から3泊4日に短縮した。 ・事前に同じ会場でリハーサルを行って、流れを確認した。 ・施設のスタッフに、可能な範囲で配慮していただいた。 ・学生時代にキャンプスタッフとして経験のあるOBOGにスタッフとして参加してもらい、裏から支えてもらうとともに、事前準備だけでなく、実際にキャンプをしながらも色々お手伝いしてもらった。
高知	スタッフが医療関係者のため、新型コロナウイルス感染予防について特に気を付けた。	参加者には「感染対策マニュアル」に目を通していただき、「体調記録表」に記録し必ず当日持参するようにした。
愛媛	従来は猛暑に伴う熱中症対策に重点をおいてきたが、今年からは同時に新型コロナウイルスなど感染対策にも留意する必要が生じた点。	熱中症対策として、室内での活動に重きを置く、プログラム中もこまめに水分摂取を促すなどを考慮した。同時に感染対策として、食事時を中心とした手指消毒の徹底、年少児を中心とした体調管理を徹底し、無理のない活動を心掛け
山口	子ども達の対応をしてくれる学生ヘルパーの教育、安全管理	学生ヘルパー向けに、講義と実体験を含めたプレ合宿の実施。糖尿病全体について、栄養について、OBである医師からのヘルパーとしての役割、心得などを伝えた。
久留米	4年ぶりの開催であり、キャンプに慣れたスタッフ・学生ボランティアが少なかった。また、集合型のミーティングがなかなか開催できなかった。	zoomを用いたオンラインミーティングを開催し、連絡ツールとしてLINEやYoutubeを活用して情報共有が円滑に行えるよう工夫した。
佐賀	これまでキャンプを行っていた施設を使用せずに、秋にイベントを企画したため、イベント自体をどのように行うか、ボランティアスタッフをどのように確保するかなどに手間取った。	今回は、実行委員長が開催場所、日程、イベント内容などを決定し、ボランティアスタッフやキャンパー募集などを各医療機関などに依頼した。

大分	<ul style="list-style-type: none"> ・中断後の再開で、学生ボランティアは全員初参加、事務局も交代しており、すべてのノウハウが途絶えている状況からのスタートだった。 ・学生ボランティアの人数がキャンパー数を下回る状況で、キャンパーの安全確保に苦労した。 ・例年、食事管理を依頼していた別府大学食物栄養学科の学生の参加が間に合わず、施設へ食事を依頼したため、適切なカロリー量の設定や糖質量の計算ができなかったことで、インスリン投与量の決定にも影響が出てしまった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生ボランティアの数が少なかったため、ボランティアとキャンパーのOBOGを募り、協力を仰ぐことで、安全を担保して開催することができた。 ・2024年度は栄養学科の学生参加ができるよう準備を進めている。
長崎	<ul style="list-style-type: none"> ①コロナ対策と、コロナ禍でもいかに安心・安全に実施できるかの検討 ②3年ぶりの実施で、スタッフの確保や初参加者とのコミュニケーションの取り方 ③コロナ対策 	<ul style="list-style-type: none"> ・消毒、換気の徹底 ・発熱者には、PCR検査の実施し、すぐに帰宅してもらう ・発熱者用に隔離室として宿泊場所を確保した ・食事作りを簡素化して、弁当を利用。飲料もお茶を沸かさず、ペットボトルを購入 ・紙コップに記名し、半日使用するのをやめ、1回ごとの使い捨てに変更し、患児・兄弟姉妹の子ども達は水筒を持参してもらった。水筒の中も保護者で消毒や入れ替えをこまめに行った。
熊本	<ul style="list-style-type: none"> ①4年ぶりの宿泊を伴うキャンプで、「白水遊水の郷」は初めて利用する施設で、管理棟はあるものの、宿泊室、調理設備、トイレ等が不十分であったことから、スタッフの負担（特に食事を作り栄養士）が未知数であった。 ②キャンパーおよび参加スタッフは、テント泊・車中泊という未経験なことが多いうえ、血糖管理も課題となった。 	<ul style="list-style-type: none"> ①スタッフは「大部分の参加者は初めての場所で決めるべきことは多いが、挑戦する価値あり」との認識で、各セッションが協力して下見、予行を行い、食事の準備はキャンプ場近くの旧小学校（廃校）の調理室を借用、レクリエーション（雨天時）は、体育館を借用するなどして工夫した。また、宿泊時は雨だったことから同体育館内にテントを張って利用した。 ②キャンプ前の10月1日に、キャンパー及び保護者、スタッフ等を集めた事前説明会を実施した。キャンパー個人に担当看護師を配置してDexcomG6装着、G6グルコース値の確認、キャンプ内容の説明、LINEグループ作成、テントグループ分け、体調管理チェックシート、スタッフミーティングなどを行った。
鹿児島	宿泊の予約ができずにサマーウォークとなった	早めから予約を行うこと
香川	5年ぶりに宿泊を伴うキャンプの開催となり、新規発症で初参加者が多いことが予想された。年齢も低学年以下の子どもが多いため、今後につながるような楽しい思い出になるキャンプにしたかった。	初参加者が多いため、安心してキャンプに参加できるようにペアリングを設けた。子ども1人につき必ず1人学生ボランティアやスタッフが付き添い、サポートを行った。今回のキャンプの目的を仲間づくり、自分以外にも1型糖尿病の子がいることを知る機会とした。